

山口大学 建学の祖 上田鳳陽先生顕彰碑
吉田キャンパス 共通教育棟玄関ホールに移設



令和4年1月12日、上田鳳陽先生顕彰碑の除幕式が行われました。
江戸末期、大内御堀（現在の山口市宮島町）で白外郎商を営んでいた福田文吉郎氏（福田百合子中原中也記念館名誉館長の曾祖父）により鳳陽先生の功績を称え福田家敷地内に顕彰碑が建立されました。長年同家により大切に保存されていましたが、学生の教育に役立ててほしいとの同家のご意向により、山口大学が譲り受けることとなりました。
鳳陽先生の終生の友、山縣禎による碑文には、先生の人となりがよく表されています。その通釈を根ヶ山教授（人文第4回卒）が手がけられました。

鴻文

第41号
発行・鴻文会

山口大学人文学部・大学院
人文科学研究科・旧文理學
部文学科 同窓会

(事務所)
〒753-0831 山口市平井773-2
沖田ビル202
電話・FAX 083-928-4527
郵便振替口座 01500-4-15902
http://kouhun.la.coocan.jp/
メール:kobun1981@ybb.ne.jp



鴻文会 会長
吉松 茂

会長就任ご挨拶

会員の皆様、おかわりなくお過ごしのことと
拝察申し上げます。

令和三年八月二八日に開催されました第一
回鴻文会総会において、会長を務めさせていただ
くことになりました。大変光栄なことと感じ
入る一方、あらためて内田前会長の歩まれた足
跡をたどるにつけ、とうていその任に耐え難い
と痛感もしております。しかし、お引き受けし
ました以上、全身全霊をもって務めさせていた
だく所存でありますので、会員の皆様方をはじめ
め、大学関係者の皆様方の温かいお気持ちをお
寄せいただきますようお願い申し上げます。

ここで少し自己紹介させていただきますと、
私は昭和四十六年三月、文理学部英米文学科を卒
業し、その後山口県で英語の教員として奉職い
たしました。大学入学当時、大学は山口市後河
原から現在の平川吉田への移転中でした。一年
は平川の教養部に通い、二年・三年は後河原、
そして四年には再び平川吉田と、めまぐるしい
学生生活でありました。現在のすばらしい大学、
キャンパスを前にするとまさに隔世の感があり
ます。(教養部時代、建物の周りは荒涼として
おり、道から少し離れると「まむし注意」の立
て札があったのを懐かしく思い出します。)

さて、鴻文会はその主たる目的として「会員
相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展
に寄与する」ことを挙げています。会員の皆様
はそれぞれ県、国の内外を問わず様々なところ
でご活躍され、また業績を残されていることと
思います。しかし、大学卒業後はなかなかお互

い会う機会も少なく、つながりも薄くなりがち
であります。特に、昨今はコロナ禍もあり閉塞
感は顕著です。このような中、私たち会員はあ
らためて、人文学部に籍を置き学生生活を過ご
したものとして、その縁を大事にしていきたい
ものだと思っています。

その一つが会報「鴻文」ではないでしょうか。
会報には総会や講演の内容や懇親会の様子など、
鴻文会や大学に関する動きや情報が掲載されて
おります。私たちは会報を手にしほし思いを巡
らせる時間が過ごせます。また、各研究室で催
される同窓会や会員の方々からの近況は、在学
当時の先輩、後輩のあの時々の場所、あの出来
事を蘇らせてくれます。会員の輪を広げ、絆を
強めるためにも、総会へ出席いただくとともに
会報にも寄稿いただくなど、是非熱い思いをお
寄せください。

次に、鴻文会の財政状況についてです。詳細
については会報にて「予算・決算」をご報告し
ておりますが、苦しい状況に変わりはありませ
ん。年々厳しさが増す中、副会長はじめ役員の方
々はなんとかがやりくりをして運営にあたっ
ているものの、今のところ明るい兆しは希薄です。
第一〇回鴻文会総会では、岡光元会長名で会員
の皆様方に「特別寄付金」のお願いがなされま
した。これからも引き続き一層の効果的、効率
的な事業計画と予算編成に努め、入学時の入会
促進など収入確保にも取り組んでいきたいと考
えております。今後ともご理解・ご協力をお願
いいたします。

余談になりますが、この度の鴻文会とのつな
がりについてははちょっととした偶然、奇縁と思え
ることがあります。

その一つは内田前会長との関係です。私は、
山口県の英語の教員として教壇に立ちましたが、
前会長は私の四年先輩にあたり英米文学科の丁
度入れ替わりということになります。県内で英
語の教鞭をとられ、退職されるまで英語の授業
はもろろんのこと、いろいろな場面で細かくご
指導いただきました。(教育関係事務局ではま
さに前任者であり、ことあるごとに転出先へ電
話して教えていただきました。)この度その後

任となり、特別なご縁を感じずにはおられません。次に、私が卒業した昭和四十六年は、我が山口大学も学生運動が過激の頂点に達してありました。大学本部は学生に占拠され、卒業式も入学式も行われませんでした。研究室で卒業証書を手渡されたのをよく覚えております。事情、背景は全く異なりますが、コロナ禍で卒業式も入学式も実施されなかった昨今、何か人ごとではない思いがしてなりません。

最後に、ご縁をいただいたこれからの四年間です。学生時代に恩師からいただいた恩恵や同窓諸氏、先輩・後輩の方々から受けた厚情を胸に、会員の皆様方と手を携えて鴻文会の発展に努めて参りますので、よろしくお願い申し上げます。

(文理第一九回卒・英語学・英米文学)

第一二回鴻文会総会報告

副会長 渡邊 早苗

四年に一度開催しております鴻文会総会は、昨年度から準備を始め、総会後には記念講演会と懇親会を予定していましたが、夏が近づくにつれ、全国的に新型コロナウイルス感染症の感染が再拡大し、やむなく、講演会と懇親会を中止し、総会のみを開催しました。緊急事態宣言下でもあり、県外からご参加下さる予定であった方には、大事をとって、出席をご遠慮いただくこととなり、大変申し訳ありませんでした。この場を借りてお詫び申し上げます。

第一二回鴻文会総会は、令和三年八月二八日(土)午後一時より、学内の学生会館会議室において、約三〇名が出席し、山本明史委員の司会で進められました。

森重副会長の開会の挨拶に続き、脇條靖弘人文学部長より祝辞を賜りました。議長に森重副会長を選出し議事に入りました。

最初に渡邊副会長が四年間の鴻文会の事業及び会計報告を行い、片山監事の監査報告の後、

議案について異議なく了承されました。続いて、鴻文会会則の改正について説明があり、議長より諮られ承認されました。最後に「役員改選」の議事に移り、新役員(案)が提案され、吉松茂会長以下別掲の新役員が選出され、今後四年間鴻文会を運営する役員体制が決まりました。

令和二年一月に内田会長が逝去され空席となっていました。この度就任された吉松会長の挨拶で総会を締めくくりました。

(人文第三回卒・西洋史学)

鴻文会役員

令和三年八月〜令和七年八月

名誉会長

脇條 靖弘(人文学部長)

会長

吉松 茂(昭四十六年卒・英語学・英米文学)

副会長

森重 祐二(昭五十五年卒・社会学)

渡邊 早苗(昭五十九年卒・西洋史学)

顧問

大塚 博久(昭三十一年卒・中国哲学)

田中 晋(昭四一年卒・英米文学)

岡光 一浩(昭四一年卒・ドイツ文学)

添田建治郎(昭四十四年卒・国文学)

委員

原口 公康(昭六三年卒・日本思想史学)

山本 明史(昭六三年卒・国史学)

齊藤 禎(昭六一年卒・東洋史学)

林田 徳夫(昭五十七年卒・社会学・社会心理学・社会人類学)

林田 徳夫(昭五十七年卒・社会学・社会心理学・社会人類学)

山田 典子(昭六一年卒・社会学・社会心理学・社会人類学)

和崎 睦子(昭六十六年卒・社会心理学)

大谷 泰子(昭六三年卒・社会情報論)

橋本 達彦(昭五十五年卒・国文学)

池田 容子(昭五十九年卒・英米語文化論)

江浪 香織(昭二十七年卒・平一三年院修了)

原田 素子(昭五十八年卒・フランス語学)

中村稚恵利(昭五十二年卒・言語情報論)

吹屋 哲夫(昭五十四年卒・東洋史学)

片山 恵子(昭五十九年卒・英米文学)

村田 裕一(昭五十九年卒・考古学)

根ヶ山 徹(昭六〇年卒・中国語学)

学内委員

中国語学

中国語学



学生数 (令和三年一月現在)

人文学部

	人文学科	人文社会学科	合計
1年	188		188
2年	200		200
3年	199		199
4年	223	2	225
合計	810	2	812

大学院人文学部研究科

	人文科学専攻
1年	6
2年	5
合計	11

資料提供 人文学部

人文学部好事例



人文学部長、
人文科学研究科長
脇條 靖弘

というのは、私たちの誰もがいわば多くの円に取り囲まれているからである。ある円は小さく、ある円は大きい。ある円は包含し、ある円は包含される。人間相互に対する心の持ち方が異なっており、等しくないからである。

ストア派の教義 (Heraclides, Fragmenta Ethica 61, 10-12)

今回は三つの事例を人文学部の好事例として紹介いたします。いずれも学生が主人公の事例です。人文学を学ぶ目的の一つは、人間としての自体的な価値を追求する力を養うことです。そのためには他者を理解し、ストア派の言うように自分を取り巻く大小さまざまな円^①をできるだけ縮める必要があります。紹介する三つの事例はそれぞれ過去を知ること、地域を知ること、世界を知ることに関わり、どれも円の縮小に役立つものです。

I 過去を知る
二〇二〇年一月十九日、山口市教育委員会の文化財保護課で貴重な見学の機会がありました。人文学の日本史ゼミの二、三年生が食い入るように見ていたのは、水洗を終えた木簡です。二一〇〇年前に書かれた木簡が眼の前で土の中から現れて来るのです。土は銚銭司の発掘場所からのものです。土器などは現場ですぐ取り出しますが、木簡は土ごと持って帰って来ます。木簡は博物館などで実物が展示されることはほとんどありません。学生を連れて行った人文学部の黒羽亮太先生の話です。「全国で

も山口市は木簡の出土が目立つ地域なんです。こんな場所は奈良の平城宮を例外として他にありません。学生がこんな経験が出来るのは極めて貴重、というか他の大学ではまずありえないことです。」



2020.10.19
山口市教育委員会文化財保護課にて

「出土する木簡はだいたい『ゴミなんです』と黒羽先生。「でも中にはわざと埋めたものもあって、何かの呪術に使ったと思われるものもあります。呪符木簡と言っていますが、文字ではなくて奇妙な文様が記されています。」



呪符木簡
山本崇「まじないの意味を探る」(奈良文化財研究所編『木簡 古代からの便り』岩波書店、2020年)より

「もつとゾクゾクするものもあります。中にはただの落書きみたいなものもあって、私は嫌いな上司の似顔絵じゃないかと思っっています。」

この日には呪符木簡も見ることができました。荷札もありました。荷札には紙ではなく丈夫な木簡が使われました。勤務評定を記した「考課」と思われるものも出てきました。業績評価表です。「題箋軸」と言って巻物の軸の部分が残っていて、表題が記されているものもありました。当時の予算帳簿だったかもしれせん。

「ナイフの柄の部分も出てきました。当時の書記は「刀筆の吏」と言って、小さなナイフと筆を持ってたんです。「黒羽先生、書記だから筆はわかりますが、ナイフは何のためでしょう。」「消しゴムですよ。」

この親近感は何なのでしょう。黒羽先生が解説してくれた。「日本の古代は、鎌倉室町江戸といった中近世を飛び越して、むしろ明治以降の近現代に近いんです。明治国家は王政『復古』してできたものですから。」学生たちは、半径二一〇〇年の同心円がぐつと縮まったのを実感したでしょう。

学生の反応がとてもよかったので、山口市の担当の方が「これほど関心を持ってもらえるとは思っていません。ぜひまた来て下さい」と大変喜んでくれたそうです。「私としてはそれが一番よかったと思っています」と黒羽先生は言います。最近では文化財を保存するだけでなく、その「活用」が求められるようになっていくという事情もあるようです。今年もまた同様の見学が計画されています。

II 地域を知る
人文学部社会学コースには三つの分野があります。現代社会学、社会心理学、民俗学・文化人類学の三つです。どの分野も「調査実習」という授業を設定していて、学生によるフィールドワークの成果を毎年報告書にまとめています。山口とその周辺地域に密着した活動が長期にわたって継続している事例です。各分野について一つずつ例をあげて紹介いたします。



社会学コース「調査実習」報告書とパンフレット

II・一 現代社会学

「ひろしま避難の会・アスチカ」は、東日本震災で広島に来た避難者の会であり、会員に対する幅広い支援を行っています。人文学部の現代社会学分野は、アスチカと長年にわたって交流があります。災害と現在社会の関係テーマに何度も調査実習を行っています。その都度アスチカに協力をいただいています。二〇一八年度にはアスチカからの要望に応じて会の結成当時から詳細な活動記録を報告書にまとめました。聞き取り調査からは、避難者たちの受けたダメージが物理的、金銭的なものだけではないことがわかります。「故郷を捨てて逃げた」という罪悪感に多くの避難者が苦しんでいることを知り、有効な支援のためにどうすればいいのかが学生たちは考えるようになりました。

アスチカは、二〇一八年七月の西日本豪雨で広島での被災者支援のボランティア活動に参加するなど活動の幅を拡げています。また、一〇年間に及ぶ避難の経験から、被災したり避難した時に必要となる情報をまとめた「くらしによりそう情報マップ」というパンフレットも出しています。二〇二二年三月には山口県版のマップが作成され、人文学部の現代社会学研究室も編集に協力しました。

担当の速水聖子先生はこう言っています。「私たち人文学部の教育の目的は、良き市民を育てることにあると考えています。それは、すぐに役立つことではないかもしれませんが、これからの社会を支えていく人に必要な学びです。」

II・二 社会心理学

野犬の数は長いスパンでは激減しています。近年周南市では野犬が問題になっています。二〇一五年には、山口県内で捕獲された野犬一、三五四頭の五一%を周南市が占めています。社会心理学分野の二〇二〇年度の報告書はこれをテーマにしています⁷⁾。

野犬が多いことだけをもって地域的な問題として見なされるわけではない。野犬が多いことを「問題である」と認識されるようになって初めて地域の課題としての野犬問題が立ち上がってくる。

調査を指導した桑畑洋一郎先生は報告書でこのように書いています。報告を読むと餌やりについての人々の意識も様々であることがわかります。ある学生は、無責任に餌やりをする人と動物愛護団体の活動家との違いはどこにあるかを考察しています。聞き取り調査によって、人間の側の喪失感や不全感に違いがあることが分かりました。そこからこの学生が自分なりに出した結論は、活動家は犬を救おうとしているのに対して、

【餌やりをする人は】野犬を救っているのではなく、自分自身を救おうとしているのである。

というものでした。具体的なテーマから深い哲学的考察に一步踏み込んでいます。

「聞き取り調査をすると、世の中にはこんな人もいるんだ、と驚くこともあります。今回の場合は、里親として犬を引き取るためにわざわざ関西から周南に引っ越して来たという人がいました。周りからは迷惑がられてましたが」と桑畑先生。「統計で分かるところもありますが、同時に聞き取り調査も欠かせません。どちらも必要です。」

II・三 民俗学・文化人類学

民俗学・文化人類学分野の実習では、毎年山口近辺の地域を一つ選び、その地域の中で現在も続けられている「生きた」民俗的事象を調査し報告書にまとめていきます。

二〇一八年度には旧下関市域が取り上げられました⁸⁾。統計処理から抜け落ちているものを拾い上げることの重要性を、民文の三人の先生方(谷部真吾先生、小林宏至先生、山口睦先生)も指摘しています。谷部先生曰く。「統計と民俗調査(フィールドワーク)は、森を見るか、木を見るかの違いがあります。両方必要です。」



オダイシサン
『下関市旧下関市域 民俗調査報告書』
(2019年)より

オダイシサンの接待は下関版のハロウィンです。王司地区では毎年四月二一日がその当日です。家庭によっては弘法大師の像(オダイシサン)を出して安置し、ハタアメというお菓子で子どもたちを接待します。「昔は一年に一回ハタアメをもらえるのが楽しかったです」、「子どもの頃は何軒回れるか友達と競っていました」、「子どもの頃は(息子を)と地区の方は言います。ある方は「(息子をおぶっていると)背中がハタアメを食べるので肩がペトペトになった」そうです。年配の方では日本全国でハタアメが使われていると思っている人もいます。ただ、さすがに最近では「うまい棒」などのお菓子の子どもたちに人気があり、ハタアメは少なくなっている

ることです。



ハタアメ
『下関市旧下関市域 民俗調査報告書』
(2019年)より

調査した学生は、オダイシサンの像、接待の準備から当日までの流れ、参拝の様子から、ハタアメの製造、流通を丁寧に記録しています。子どもたちに特別な体験の記憶を残してあげたいという、接待をする人の気持ち伝わってきます。接待は個人の出費ですが、ある方は「手を合わせられるというのは人間だけであり、素晴らしいこと。接待できる間は何を節約しても続けたい」と述べています。

教員の研究にはならない小さなテーマでも、学生の調査によって記録に残すことができそうです。「自分たちの文化を再発見した」と地域の方々は喜んで下さっています。「若い人が行く」と、それだけで地域の方は喜んで下さるし、学生には自信になります。学生を地域の方に育ててもらっているという実感があります。「学生は自分で知らない人にアポを取って話を聞きます。そういう現場力が重要なんです」と民文の先生方は言います。「学生はみんな度胸がついたと言いますね。正直、私たち教員も同じで、みんな今でもアポ取りはプレッシャーなんですよ。」

学生はこうして社会で生きていく力を身につけていくのです。

III 世界を知る

人文学部では学生を募って、台湾や韓国に大学に連れて行く取り組みを行っていました⁹⁾。目的は英語です。向こうの学生の英語力の高さを実際に見てもらうのです。台湾の東呉大学には七年連続で行きました。東呉大学は大学としてのレベルが高く、また、見学する相手の学生は英語を専門にしていますが、それでも同じアジア人なのは英語だけの授業が行われているのを見て、学生たちは衝撃を受けます。山口大学の学生は彼らにインタビュも行いますが、「大学の外で英語を使うのですか」と尋ねると、「使わない」という答えが返って来ます。いったいどうして普段使わないのにこれほど英語ができるのでしょうか。



学生を引率した滝野正二郎先生に聞きました。「正確なところはわかりませんが、でも一つ印象的なのは、向こうの教員の留学率の高さです。しょっちゅう欧米に行っている。そういう教員が当たり前なので、学生も自然にそうなるという面があるように思います。」

◎令和2年度事業報告

1. 第52回役員会（5月書面開催）
2. 第53回役員会（10/17）
3. 会報「鴻文」編集会議（10/17・12/17）
4. 会報「鴻文」第40号発行（1/25）
5. 第29回山口大学同窓会理事会（3/24）
6. その他

◎令和2年度決算

収入総額	4,730,820 円
支出総額	1,290,155 円
残高（次年度繰越金）	3,440,665 円

〈収入の部〉

科 目	2年度予算額	決 算 額
繰越金	3,186,286	3,186,286
会費収入	1,800,000	1,460,000
賛助金	200,000	84,514
雑収入	114	20
合 計	5,186,400	4,730,820

〈支出の部〉

科 目	2年度予算額	決 算 額
会議費	50,000	15,232
役員等行動費	30,000	2,000
事務所運営費	950,000	864,300
事務費・通信費	200,000	215,623
会報費	750,000	183,100
ホームページ維持費	25,000	9,900
分担金	151,000	0
寄付金	0	0
助成金	100,000	0
慶弔費	50,000	0
予備費	2,880,400	0
合 計	5,186,400	1,290,155

〈特別会計〉

科 目	元年度財産	2年度財産
中国電力債	1,465,537	1,465,537
合 計	1,465,537	1,465,537

令和3年4月28日、監査の結果過誤なく的確に
 経理されていることを確認します。

監 事 山田 典子
 片山 恵子

◎令和3年度事業計画

1. 第54回役員会（4/17）
2. 山口大学同窓会理事会（5/21）
4. 第11回鴻文会総会（8/28）
5. 会報「鴻文」編集会議（9/15, 1/21）
6. 第9回山口大学ホームカミングデー（10/30）
7. 会報「鴻文」第41号発行（3/1）
8. 山口大学大学院修了式・山口大学卒業式出席（3/23）
9. その他

◎令和3年度予算

〈収入の部〉

科 目	3年度予算額	摘 要
繰越金	3,440,665	
会費収入	1,800,000	10,000円×180人
賛助金	200,000	
雑収入	35	利子等
合 計	5,440,700	

〈支出の部〉

科 目	3年度予算額	摘 要
会議費	50,000	役員会、会報編集会議等の交通費、その他
役員等行動費	30,000	会長・副会長等活動費、会報編集会議等の活動援助
事務所運営費	950,000	家賃、人件費、事務所経費（電話・電気、その他）
事務費・通信費	200,000	封筒印刷6,500枚、事務印刷、郵送、消耗品、雑費
会報費	750,000	印刷7,300部、発送6,300通、発送アルバイト代
ホームページ維持費	10,000	レンタルサーバー料
分担金	151,000	山口大学同窓会（手数料含む）
寄付金	0	
助成金	100,000	「同窓会等」開催助成（手数料を含む）
慶弔費	50,000	他同窓会への祝い金、祝電、香典料、弔電、その他
総会運営費	800,000	通知郵送費、講師謝金、会場設営費等
予備費	2,349,700	
合 計	5,440,700	

〈特別会計〉

科 目	3年度財産	摘 要
中国電力債	1,465,537	東洋証券
合 計	1,465,537	

着任教員ご挨拶

比較文化科目の担当として



Kateryna Olha
カテリーナ・オリハ

令和三年四月一日付で人文学部に着任いたしましたカテリーナ・オリハと申します。欧米言語文学コースで比較文化を担当しております。オンライン会議が続いている中、直接話したことがない先生方もいらっしゃると思いますので、この機会を借りて挨拶とお礼を申し上げます。

人文学部の講師になるまでの道は長かったです。その道は一三年間ずっと山口大学と繋がっています。専門は日本文学であり、初めて日本に来たきっかけは、学生時代の留学でした。大学は山口大学でした。ウクライナで何年間も日本文化関連の講義を聞いていたにも関わらず、かなりのカルチャーショックを受けました。しかし、外国人留学生向けの授業を担当してくださった先生方大変お世話になったため、帰国したら、教師になりたいと思いつつ、日本文化の美しさ、日本文学の深さをぜひ学生に伝えたいと思いました。

その願いはすぐ叶いました。ウクライナで修士課程を修得し外国語センターで日本語と英語の教師として働いてから、リヴィウ市にある国立大学で日本語と日本文化の授業を担当することになりました。しかし、今後ウクライナに居続けると、日本文学の専門家にはなれないと痛感し、機会を得て再び山口大学の教育学研究科と東アジア研究科へ進学しました。

博士課程の三年間で、私の中の「文学研究」の理解が大きく変わりました。作家論を乗り越え、文学批評を一つの支配的な理論としてではなく、そして概念の寄せ集めとしてではなく、

読者と作者の共同体の中にある言説的な実践として考え直しました。その結果、もともと日本の大正・昭和の幻想文学をテーマとした博士論文を書いていた私は、文学全体と比較文学に強い関心を持ちました。現在、比較文学、翻訳研究、そしてグローバル社会では重視されるポスト・コロナ理論とフェミニズム理論に関心が向かっています。

人文学部に着任する前に、二年間山口大学教育支援センターの教員として、共通教育の「英語会話」授業を担当していました。そのとき、全ての学部で英語を教えました。山口大学の学生の中には、学部によって英語能力が異なっても、異文化に興味があり、留学をした学生が多いと分かりました。

人文学部の比較文化科目のシラバスを作成するとき、日本文化と日本文学の経験、そして英語教育の経験を活かし、現代の学生ニーズに合わせた授業を作るために力を尽くしました。さらに、人文学部の学生が異文化をより深く理解し、異文化コミュニケーションができるグローバル人材になるために必要な知識の枠組みについて考えていたときには、アメリカの様々な大学で教えられるカルチュラル・スタディーズへの領域横断的なアプローチを参考にしました。文化、文学、社会事情、哲学についての議論の場となり得る比較文化授業を目指しております。

日本文化を詳しく勉強した大学時代の私は、実際に異文化と出会って、カルチャーショックを受けたことがあります。カルチャーショックとは、他の国の習慣や人の考え方を自己内理解の枠で捉えた結果であり、その原因は情報不足というより、観点の相違であると確信しています。私の授業では、他の国の文化や文学についての情報だけではなく、宗教、女性の地位差別等についての様々な観点を紹介し、学生と議論しています。このようなことを踏まえて、私の任務は、異文化に関心を持っている学生のグローバル意識を高めることだと思っております。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
(欧米言語文学コース 講師)

新任のご挨拶



中元 さおり

二〇二二年四月一日付けで山口大学人文学部に着任いたしました中元さおりと申します。日本・中国言語文学コースで日本近現代文学を担当しております。コロナ禍での着任となり、なかなかみなさまに直接ご挨拶申し上げる機会を失したままになっておりますので、改めてこの場をお借りしてご挨拶させていただきます。

私は、二〇二一年三月までは広島県内の大学で非常勤講師として、日本近現代文学や日本語表現科目などの授業を担当しておりました。非常勤講師という限定的な立場ではありましたが、さまざまな大学の教育現場を経験させていただきました。試行錯誤の多い経験でしたが、学生が大学教育に求めているものを把握し、それに誠実に応えていくことの難しさと大切さを実感してまいりました。

山口大学では、先生方や学生に助けていただきながら、新鮮な日々を送っております。文学に興味をもっている学生も多いようで、研究への意欲と関心が高く、よい刺激を受けています。授業で寄せられる学生の感想などからいろいろな気づきを得ることもあり、ともに学び合うことの楽しさを感じています。

私はこれまで、戦後の代表的な作家である三島由紀夫の作品を中心に、戦後文学と時代との関わりについて研究をしてきました。作品が書かれた同時代の状況に目を向け、高度経済成長期の時代状況と作品との影響関係について考察しています。特に、高度成長期の文化や風俗にみられる新しい動きと文学がどのようにお互いに影響しあっているのかを、三島文学を中心に

据えて研究することをとおして、社会という枠組みにおける文学の存在意義を考えていきたいと思っております。

私は大学時代に文学作品を読む楽しさに出会いました。「おもしろい小説だったな」「なんだかよく分からない作品だったな」といった素朴な感想から出発し、その「おもしろさ」や「分からなさ」の正体を探ろうと作品の表現や背景、また作者について調べていくうちに、自分の素朴な感想がもっと具体的にクリアなものへと変わっていく楽しさを体験しました。また、授業のなかで友人や先生の考えを聞くことで、別の視点を教えてもらうことも多くありました。一つの作品でも解釈の仕方はバラエティに富み、そこに読む人の感性や思想が溶け込んでいくことなどを学び、文学研究の楽しさの一端を味わうことができました。大学院での本格的な文学研究はもちろん楽しいだけでなく、数多くの文献にあたり思考を論理的に精錬させていくという厳しさも痛感しました。しかし、それは常に自分の思考をアップデートしていくという刺激的な営為でもありました。このような刺激的な体験を、山口大学の学生に伝えていくことも私の役割だと感じています。

学生にとって「ヘカーナビ」のような存在でありたいというのが、現在の私の目標です。研究の目標地点に向かってそれぞれのペースで進んでいる学生にむけて、より良い道筋を提案すること、時には寄り道や回り道にもおもしろい発見が潜んでいることも伝えることができればと思っています。そのためには、まず自身のデータベースを日々更新していかなければなりません。自分の研究をとおして新たな知見に多く触れ、それらを学生に還元していけるような教育活動ができるよう、決意をあらたにしております。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。
(日本・中国言語文学コース 講師)

追悼

和田敏英先生を偲んで

田中 晉

六月一〇日に鴻文会事務局より役員あてに通知があり、和田敏英先生の訃報を知り、あまりに突然のことに驚き、そして深い悲しみに浸りました。六月六日にご逝去になり、既に葬儀も済まされた旨、ご家族からご連絡があったとのことでした。享年九一歳の天寿を全うされたことでした。晩年は奥様とゆつたりとした生活を送られながら、読書と思索の日々を重ねておられることと拝察致しておりました。いつかお訪ねしたいと思いがちでも、私が病を患い長期の入院を繰り返してしまいました。昨年二月には奥様のご他界となり、その後はさぞお寂しき明け暮れであったこととお察し致します。ご無沙汰を重ねるままに時が過ぎ去ったことが悔やまれておりません。別離の悲しみを身に染みて感じております。

和田先生は昭和五年津和野でお生まれになりました。昭和二三年旧制山口高等学校文化乙類にご入学、第一学年を修了されたところで学制改革に伴い山口大学文学部文学科にご入学となり、昭和二八年ご卒業、東京都立大学大学院に進まれました。昭和三二年山口大学文学部に助手として赴任され、講師、助教授を経て、昭和四八年より教授、五三年文学部改組にともない、人文学部教授とられました。その後には評議員などの要職を歴任され、平成五年定年退職、山口大学名誉教授の称号が授与されました。定年後は東京理科大学にお勤めでありまし。永年のご功績に対し、平成二二年度春の瑞宝中綬章をご受賞になりました。

このように、先生は山口大学文学部第一回のご卒業であり、先生の歩んでこられた道は、まさに山口大学文学部、人文学部の歴史であったと言えます。私たちの同窓会、「鴻文会」の名付け親でもあられます。初代鴻文会

会長として会報創刊号に、「『鴻文会』の愛称は、山口市の由緒ある鴻の峯にちなみ、大鳥のごとく将来雄飛する期待をこめ、さらに旧制山高同窓会「鴻南会」の一字をも継承することになります」と記しておられます。先生は「旧制山高、山口大学文学部文学科、人文学部の三者をそれぞれに縁をつなぐ者」としての役割を常に意識しておられました。

先生のご専門は一八世紀英国の小説ですが、とりわけスウィフトの研究者として高名でいらつしやいます。昭和五八年ご出版の『「ガリバー旅行記」論争』は多年にわたるご研究の成果ですが、これは刊行以来現在に至るまでの『ガリバー旅行記』批評に関する批評変遷の歴史を綿密に辿り、熾烈な論争を通しての問題点を浮き彫りのように闡明した論述で「近來まれにみる日本文学会における労作といわねばならぬ」と学界で高く評価され、その後のスウィフト学では必ず参照される重要文献となっております。

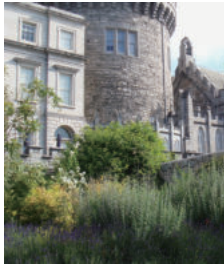
つづく昭和六二年ご出版の『イギリス一八世紀小説論』ではスウィフトを除く五人の代表的作家が論じられていますが、「いずれも著者の綿密な言葉の分析に支えられて説得力がある」とこれも頗る好評でありました。平成五年に上梓された『スウィフトの詩』は詩人としてのスウィフトを伝記的視点を交えつつ論じられたもので、この面での日本で初めての本格的な研究であります。先生独特の巧妙な訳はそれだけでも必読に値するものと思われま。

昭和四八年秋から一年間シェイクスピアの故郷に近いイギリス・ウォリック大学客員研究員として、さらに昭和六〇年秋から五か月間、再度の文部省在外研究員として、アメリカ・ハンチングトン図書館やスウィフトの母校アイルランド・ダブリン大学、大英図書館等においてスウィフト研究に従事されました。この機会が先生の学問にとつて大きなプラスになったことは間違いないと思われま。先生ご自身、「スウィフト関係の稿本や稀観書を読み漁り、未見未読の文献を貪欲に渉猟した」と振り返っておられますが、その成果はご著書、ご論文におい

て、日本では入手困難な文献に数多くあたられていることにも現れております。

先生はスウィフト研究に没頭されましたが、旅もこよなく愛されました。その観察眼の鋭さには驚きを禁じ得ませんが、そのことは「イギリス滞在記」、「続イギリス滞在記」、「Swiss研究の旅」(「英語と英米文学」九、一〇、二二号)や「山口大学学園だより」二二三号などにかがえま。『Swiss研究の旅』には、ダブリン郊外で暖かい家庭に奇遇して庶民生活を楽しみ、週末にはスウィフトゆかりの地をあちこち尋ねられたご様子が記されております。スウィフトが首席司祭として君臨し、菩提寺となった聖パトリック大聖堂への墓参、胸像や墓碑銘との感激の対面、誕生日に当たる一月三〇日には、生誕地を尋ねてダブリン城裏手の門近くの石畳の一隅に銘板を発見、その夜は本場の黒ビール、ギネスを満喫されたことなどが細やかに綴られております。『和田旅行記』には読者を引き付ける魅力があります。先生の旅行記は単なる旅の印象にとどまらず、常に文学とのかかわりにおいての旅であったのです。

聖パトリック大聖堂



ダブリン城

私は大学で教職について以来二つの大学を経験しましたが、何処にいても常に母校に戻れればとの願望がありました。願望は所詮願望に過ぎぬかと思っておりましたが、その夢が現実のものとなり、恩師和田先生の下で務めさせていただくこととなった時の有難さは忘れることが出来ません。その先生はもう帰らぬひととなりました。先生を失うことは、人文学部の歴史はもとより、教育界にとつても学界にとつても大きな損失であります。惜別の情は言い尽くしませぬが、深い感謝と敬意の心を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

和田先生、どうか安らかに眠り下さい。
(文理第一四回卒・英米文学)



同窓賛歌

高齢者、理容院に行く。



村田 和夫

「そろそろ散髪に行く」と言うと、マスクの生徒が怪訝そうに私を見る。最近開業の理髪店の若い店主から「今日この後は何をされますか」と聞かれ、思わず「試験問題を作る」と答えてしまい個人情報漏れた。店主は一瞬沈黙し、剃りの手を止め「人手不足なんですかね」と聞いた。素直に答えた。自分は首をさらし、相手は鋭利な刃物を手にしている。怒りは六秒で収まる。英語に携わって五二年。現在も、瑠璃光寺五重塔の見える私立高校でお世話になっている。SLの汽笛に五十年前を思い起こす。

思えば、先頃亡くなった和田敏英先生が、英国でのスウィフト研究の後帰国された折に「散髪はどうされましたか」と尋ねた。「自分で切った」とのこと。スウィフトのことは恐ろしくて聞けなかった。「ステレオのスピーカーをどのくらい離すと立体音になるか」と聞かれ「約一メートルです」と答えたのが後々気になった。英語以外でなんとか対応しなくてはならなかった。

先生の叙勲祝賀会の写真では白髪がひよいとのぞいている。「スウィフトの髪もこうなんだ」と笑顔がささやく。若い頃は、S・モームを一週間で一冊読まれたそう。そのモームはスウィフトの散文をすべて暗記していたと英文学者の中野好夫が述べている。三人が重なる。数年前は、ダンテを読まれていたのだが……。

後に、私は英国の大学に研修に出かけた。「理髪店での英語」は教科書にはない。困った。学寮に帰り鏡を見ると気に入らない。ここは、先生の「自分で切った」に従った。

小西邦太郎先生は大の散髪嫌いで、駅前の理髪店を利用されていた。散髪の前に「急いでく

れ。次の列車に乗る」と言っておられた。

和歌の高名な研究者でもあった先生は、昭和天皇の歌会始に招待が決定していた。皇居前の理髪店で、「急いでくれ……」では、と心配したが、崩御のため拝謁はかなわなかった。

私も若い頃は散髪嫌いで、親が持たせたりリンゴを、散髪の終わる前に食べてしまったそう。池本喬先生宅では、辞書ではなくフルートを持参して先生のバイオリンと合奏を楽しんだ。別の部屋から「ギー、ギー」と何か聞こえてきてトリオになる。ペットのオウムだと後に判明した。「今日はオウムの具合が悪い」と授業中に仰ったが、「授業を早く打ち切られたら良かったのに」と、授業後に心優しい女子学生達が喧しかったかどうかは思い出せない。

広島まで、アムステルダムコンサートへボウを聴きに一緒にしたとき、「フルートは君の方がいいね」と冗談を言われた。楽団の楽器は木製で、音色がくぐもっていたからだろう。後に入れた木製のフルートが、三〇年の付き合いで、その響きが私にくぐもりを与えている。

「君の英語はイデオマチックでない。添削をしよう」と言われ、フルートを辞書に替えた。それで今の私がある。退職時にYさんと引越して手伝いに行つた折に頂いたマンドリンは、今日も我が家で、聞こえぬ調べを奏でている。

今、私はすでに先生方の当時の御歳を超えているが、その深さ、広さ、高みを前にただ跪くのみ自分をどう処するべきなのだろうか。

三年の春に読んだS・モームの「人間の絆」に「人生は無意味。ペルシヤ絨毯の模様も意図の結果ではない」とある。「空の空なるかな(旧約聖書)」で更に追い打ちをかけられる。池本先生は、体調を崩された奥様のことを気にかけて、「明日を思い煩うな(新約聖書)」を掲げ、所々にされていた。名言で思考停止にさせようだが、私も、明日は明日に任せ、乃木坂ならぬユングの「シンクロニシティ(意味のある偶然の一致)」を足掛かりにして、ラグを織るための糸紡ぎに「日の名残り」を送ろうかなと思えます。

(文理第一八回卒 英語学・英米文学)

活到老学到老



吹屋 哲夫

日本が中国と国交を回復したのが昭和四七年、当時、私は高校一年であった。山入入学時にはまだまだ近くて遠い国であった中国への関心から専攻は東洋史とする。部活は経済学部に入学生した友人の勧めでESSに所属することにした。研究室でも部活でも優しい先輩、愉快な同期や後輩に恵まれ、自宅生ながら楽しく大学生活を送った。畑地先生の熱心な御指導に十分に応えることはできなかったが、文学部での四年間が社会に出てからの生活の礎となった。

卒業後は山口県の高校社会科教員になったが、学生時代、専攻は東洋史、部活はESSだったためか、両者を合わせた中国語を機会があれば習得したいと思っていた。下関の高校に勤務していた三〇歳のころ、一生の師となる中国人の先生に出会った。中国語の発音ができるようになり、文法も分かるようになった。

そして二度目の山口大学通学、今度は人文学部の中国語・中国文学専攻である。三八歳になつてはいたが、定時制勤務の午前中を有効活用するため、科目等履修生として中国語の講義を聴講することにした。山大では中国語の教科教育法を開講していたので、高校教員としての幅が広がるのも山大通学を思い立ってきたきっかけであった。入谷先生、富平先生の講義を年の離れた後輩の皆さんと聴講し、充実した時間を過ごせた。また、当時勤務していた防府商業高校には中国語の授業があり、一緒に聴講した後輩の皆さんを教育実習生として迎え、中国語教学能力を高めた。ただ、翌年には全日制勤務に変わったので、山大通学も一年で終わってしまった。防府商業高校全日制では中国語講座を企画・実施したり、社会人対象の中国語講座を開くなど、山大で学んだ中国語、中国語を生

かすことができた。

現在、山口県文書館に勤務させてもらっている。文書館が山口県地方史学会の事務局を担当している関係で、国史の田中先生の御指導を四〇年ぶりに受けることができた。職場では鴻文会会員や関係者の方にもお世話になっている。古文書と、漢文や中国語は関係なさそうだが、いくつかの発見もあった。古文書の漢字には異体字が存在するのを初めて知った。その中には「山脉」の「脈」(脈)や、「災害」の「灾」(災)など、現代中国語では正字として使用されているものもある。また、現代中国語の正字(簡体字)には草書体から生まれたものも多い。「東、車、乐、书」は古文書の中でもよく見かけるが、中国ではいずれも正字である(東、車、楽、書)。漢字の読みでも興味深い共通点がある。「参差」は日本語では「しん・し」、中国語では「ツェン・ツ」読み、日中両国で特殊な読みとなっている。意味は日中ともに「不ぞろい」である。中国史と中国語を学んできたせいか、文字や語彙の日中の共通点を見つけると、ついでに楽しくなってしまう。

日中間でニュアンスの違う単語もある。例えば「着实」(着实)。「実」は草書体から生まれた簡体字なので古文書にもみられる。「着实」は御存じのとおり、「手堅く確実に行うこと」の意味だが、「着实」は「心から、本当に」の意味で使われ、「着实感谢」のように用いられる。因みに日中辞典で「着实」を引くと「踏实」という日本語では使われない単語が出てくる。

中国語の森に入りかけるところだったが、このくらいにしておく。言語の日中間の共通点や相違点、起源などを学ぶことで、学生時代は政治や経済に偏りがちだった自分自身の歴史的視野が広がったような気がする。「生涯学習」を、中国語では「活到老学到老」という。私の「活到老学到老」の起点となった山口大学に、「着实感谢」。

(文理第二七回卒 東洋史学)

卒業して四〇年



樋口 敬恭

五年前に山口七夕会に入りました。山口七夕会とは、山口市を愛し山口市の発展を願う人達が、ふるさと山口の発展に寄与することを目的として発足した会です。きっかけは、三菱総研が主催している丸の内プラチナ大学が地方の町おこしで山口にスポーツをあてていたので参加したところ、この七夕会を知り入会しました。その七夕会の会報に社会学の小谷先生が寄稿された記事を拝読して、懐かしい気持ちで沸き起こり、走馬灯のように山口大学の思い出が駆け巡りました。

山口大学人文学部に入学したのは一九七八年サザンオールスターズがデビューし「勝手にシンドバッド」が流行った年です。最初に下宿したのは、山口の石観音町の一軒家の二階で隣の部屋とは襖を隔てた部屋でした。

風呂も無く、トイレも共同でした。下宿は少し大学から離れており、近くの下宿している人たちと過ごす時間は当然長くなり親しくなってきました。二年生になり人文学部東洋史研究室に入り、卒業したのは、一九八二年。人文学部の一期生で、四〇年経ち、同級生もそろそろ第二の人生を踏み出す頃です。大学のキャンパスに行きたくありません。昔と同じ風景があるわけでもなく、でも山口大学は、私にとってふるさとなのかもしれません。

四年前に山口に行きました。湯田温泉は様変わりしていました。学生時代に仲間とちよくちよく食べに行つた「蛇の目寿司」やラーメンの「おそ松」はありませんでした。ただ樫野川は変わらず悠然と流れています。山口の自然に触れ、また住みたいなどの思いが湧いて来ましたが、家族や昔の友は山口には住んでいないこ

とで現実には引き戻されず。

東洋史研究室では中国の政治史を専攻しました。メーカーに就職しましたが、中国の歴史を勉強したのは役に立ちました。仕事で一〇〇回ぐらい中国に出張しました。仕事で訪れる各都市の歴史的建造物を見ることが出来て中国を良く理解し、また親友ができました。彼らは上海出身と広州出身の親友です。

上海と広州は上海語と広東語と言葉も違い、食の文化も違い中国の広さを肌で感じました。彼らと食事をよくし、休みには九寨溝、黄山など旅したのは良き思い出です。九寨溝は四川省の山奥にある透き通った水が流れる峡谷です。辺り一帯が石灰岩質の地層が侵食されて出来たカルスト地形で、湖に空の色を色彩豊かに映し出しています。湖沼に近づけば、魚や、湖に横たわる樹木の細部まで見ることができました。その光景は今も忘れることはできません。

私が今大切にしている中国の一節を最後にご紹介したいと思います。恩師が大切にされている一節です。中国の前漢の武帝の時代の司馬遷の史記の刺客列伝から語られた一節です。

風蕭蕭兮易水寒、壯士一去兮不復還

(風しようしよう易水寒し、壮士一たび去って復た還らず)

燕の太子は秦が燕に迫る情勢の中で荆軻に秦王の暗殺を依頼しました。秦王は後の始皇帝です。刺客を引き受けた荆軻は、燕の易水(現在河北省内)のほとりに立ち、集まった人達と別れを告げる時に唄った詩です。風がもの寂しく吹いて、易という川のの水は冷たく、壮士(荆軻)はここで別れて、二度と帰ることはないだろうという意味です。荆軻の暗殺は未遂(失敗)に終わりましたが、今の世にも語り継がれています。

コロナ禍で在宅勤務が昨年から続いています。自分の人生を振り返る時間が多くあり、考えさせられる一節です。DXの時代になりましたが、大学時代に培った人との温もりは大切に生きていきたいものです。

(人文第一回卒 東洋史学)

大学図書館からの

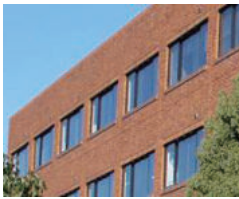
卒業を迎えて

島 文子

三十数年前に山口大学を卒業してから、ずっと大学図書館で働き、二〇二二年三月にこの仕事からの卒業を迎えます。この間、京都を中心に、関西地区、関東地区から北海道まで六つの国立大学の図書館に勤務してきました。

どの大学図書館での仕事も楽しくやりがいがあり、もちろん仕事に固有の厳しさや悩みもあって、たくさんの思い出が地層のように積み重なっています。今回、こうした思い出のいくつかを振り返り、個人的な観点から大学図書館の近年の歴史をご紹介してみたいと思います。

最初に就職した一九八四年頃は、世の中に先駆けて大学図書館の業務電算化が始まった時代で、蔵書の目録をデータ化してコンピュータ検索ができるようになる事業が始まったばかりでした。このとき、私たち図書館員が一冊ずつ地道にデータ作成をしたことから始まった蔵書検索システムは、現在ではC i n i B o o k s (サイニブックス)という名前の当たり前の社会インフラになっています。ただその頃は伝統的な手作業での図書館業務も続けており、タイプライターで昔ながらのカード目録も作っていました。



この後も社会の進展に沿って、一九九五年頃から文書作成がパソコン作業になり、全業務のシステム化が進んで貸出返却や図書購入の手続きもコンピュータ端末で行う

など、仕事では常に情報機器とともにあるようになりました。システムそのものの設計や修正インターネットサイトの運用などにも携わり、学生時代には全く縁のなかったICT技術との付き合いがいつの間にか普通のことになってい

きました。

二〇〇〇年代に電子ジャーナルが学術雑誌の主流になったことから、大学図書館での資料の取り扱い方法に大変革が起こりました。二〇一〇年頃までには、電子ジャーナルが学術研究に不可欠なものとなった反面、それを利用するための高額な経費の確保に大学を挙げて奔走する事態となりました。研究者がインターネットから直接学術資料を見ることが当然になったことから、紙の蔵書をもつ大学図書館という「場」はもう不要なのではないか? 大学図書館の新たな機能は何か? という議論を繰り返して行いました。

当時世界の大学図書館では、学術資料や研究成果としての学術論文の本文をインターネット上で公開する「オープンアクセス」の考え方が提起されるようになりました。私が勤務する大学図書館でもこうした考えに呼応して、貴重な古典籍蔵書を電子画像にして公開するデジタルアーカイブや大学に所属する研究者の著作物(教員等が発表した学術論文)を集めて公開する機関リポジトリを立ち上げ、世界有数のコンテンツをもつシステムに育ててきました。今は、学術論文だけでなく研究の中で得られたデータ等も含めて成果物として公表する流れを作っており、オープンアクセスは大学図書館の新たな機能として、世界の学術研究の発展や社会の進歩に大きな役割を果たしています。

振り返れば、従来型の紙の本の整理と提供に始まり、社会の情報化と電子化の流れに翻弄されながらも、それらを最前線で学び活かし駆使して新しい大学図書館機能を実現し、長い間大学の教育研究を支援してこられたことは大変幸せであったと思います。

思い出話ばかりになりましたが、卒業生の一入として、山口大学の学生の方には、単なる「図書館」ではない大学図書館の現在の姿を知り、最大限まで活用してほしい、特に図書館司書をめざす方には、さらに新しい大学図書館機能を開発し展開する仕事を志していただきたいと願っております。

(人文第三回卒 国文学)

山口大学とのご縁

原田 恭子

山口大学人文学部を卒業して、二〇年が経ちます。このたび、節目の年にこのような学生時代を振り返る機会を与えていただきましたことにまず感謝申し上げます。

山口大学では、かねてよりマスコミ志望だった私は、人文学部社会情報論コースを専攻し、瀬瀬先生のもと現代政治社会学を学びました。

瀬瀬先生のゼミは、三年時より卒業論文に向けてテーマを決め、考察しながら論集にまとめていきます。今思えば論文とも言えないような稚拙な内容で文章としても課題が山積みでしたが、先生は丁寧なペンを入れてくださいました。先生をはじめゼミの先輩や同期生と意見を交わす、その時間が貴重で有意義だったと感じています。

卒業後は、県内のケーブルテレビに就職しました。夢だった仕事につきながらも、日々の業務の中で挫折してしまうことも多く、恥ずかしながら五年で自ら終止符を打ってしまいました。その後、実家のある山口市に戻り、結婚し、現在、小学三年と五年の二人の娘を育てながら主人の家業である婚礼衣裳や結婚式場を手掛けるブライダル界は、新型コロナウイルスの影響を大きく受けた業界のひとつです。会食を主とした結婚式は、感染拡大が懸念され、昨年度は延期も相次ぎました。



山口大学の学生もオンラインで授業を受講していると聞きますが、一昨年五

月、弊社では、山口県で初めてオンライン結婚式を実施しました。披露宴会場と遠方のゲストをオンラインで繋ぎ、会話をしていたくなど新しい祝いのかたちとしてサービスの開始以来多くのカップル様にお喜びを頂いています。さらに、遠方の方に宅配でフレンチをお届けし、時間と食事を共有しながら楽しんでいただけるよう提案しています。

私は、主に花嫁様・花婿様の婚礼衣裳を案内していますが、インスタ映えならぬ「オンライン映え」することを考えながらの提案に変わってきました。

不思議なことで、縁あつての現在の仕事ではありませんが、「お客様の幸せを願い、想いに寄り添い、素敵なところを引き出してさしあげる」まさに自分が以前諦めてしまったアナウンサーという仕事にも繋がっていると感じます。

ブライダルの仕事は、人生の大切な節目のお手伝いをさせて頂くことで、重責である分ともやりがいのある仕事です。卒業生が弊社に就職してくれることもあり、お客様としてご来館いただくこともあります。地元だからこそご縁をいただいています。

今になって思うことは、「人との出会いは自分の成長への大きな糧になる」ということです。学部も多く、多岐にわたる専門分野の先生をはじめ、様々な夢に向かう学生との出会いは、自分の中の引き出しをたくさんつくってくれました。入学当時の私には、見えなかった世界を広げてくれたのも山口大学です。今も地元なので近くを通りながら当時を思い出します。

先日、本棚から瀬瀬研究室でまとめた論集を取り出しました。ゼミ生の修論・卒論だけでなく、先生の一人ひとりに向けた温かい言葉、仲間との思い出の写真も載せられていました。

二〇年が経ち、学び舎での時間は、私にとつての誇りとなっています。先生が願ってくださった一人ひとりの活躍できる場所……いつの日か胸をはって報告できますよう日々、精進してまいります。

(人文第二一回卒 社会情報論)

令和二年度 学部卒業生・大学院修了生の進路

	学部卒業	大学院修了
宿泊業・飲食サービス業	7	
教育・学習支援業	20	1
医療・福祉	11	
複合サービス事業	5	
サービス業	4	
公務	30	
上記以外の就職先	1	1
進学	8	
合計	175	2

	学部卒業	大学院修了
建設業	6	
製造業	9	
情報通信業	24	
運輸業・郵便業	5	
卸売業・小売業	27	
金融業・保険業	12	
不動産業・物品賃貸業	3	
学術研究・専門技術サービス業	3	

資料提供 人文学部

原稿募集・投稿要領

編集部からの依頼原稿だけでなく、会員からの自主投稿によっても会誌の編集を進めます。

ご自身の学念時代の思い出と、現在の近況などを綴った原稿をお寄せ下さい。投稿要領は次のとおりです。

(一) 本文の書式はタテ一行二文字とし、分量は全七二行以内とさせていただきます。

(二) これとは別に、

①タイトル、

②氏名、

③自身の顔写真一枚を文頭に置き、

④文末に文理または人文卒業年次・専攻を必ず()内に表記してください。

(三) 顔写真以外に写真を掲載することも可能です。

(四) 掲載は全体で半頁(二段)組みとします。半頁以内に掲載できるよう配慮してください。半頁を越える場合は、その分だけ文章の削減をお願いすることがあります。

(五) 明らかな誤字、脱字、それに文法上の誤記などについては、編集部で補訂します。

(六) 以上、今号の「同窓賛歌」頁を参照ください。

(七) 会誌は鴻文会ホームページに掲載します。

(八) 原稿は返却しません。写真は返却します。

(九) 送稿には、印刷費削減のためメールをご利用ください。

(一〇) 送稿先は当会事務所内、編集部宛。

(一一) 締切りは、毎号とも一月末日とします。

鴻文会会則

(昭和五十六年一〇月三十一日制定)

(総則)

第一条 本会は鴻文会と称し、事務所を山口市一平井七三―二沖田ビル二〇二におく。

(目的) 第二条 本会は会員相互の親睦をはかり、山口大学人文学部の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第三条 前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- 1. 会報の発行及び会員名簿の管理
2. 会員相互の連絡、親睦の増進
3. その他必要と認められる事項

(会員)

第四条 会員は次のとおりとする。

- 1. 正会員 山口大学文学部文学科卒業生、人文学部卒業生、文学専攻科修了者及び大学院人文学部学生及び大学院人文学部研究科修了者
2. 特別会員 山口大学文学部文学科旧教官、人文学部教官及び旧教官

(経費及び会費)

第五条 経費は、会費、寄付金、その他の収入をもって当てる。正会員は、原則として入学時において、終身会費一〇、〇〇〇円を納入する。

(役員)

第六条 次の役員をおく。任期は原則四年とし、再任は妨げない。

- 1. 会長 一名
2. 副会長 二名
3. 委員 会長が委嘱する一五名以内の数とする。
4. 監事 二名

(役員の職務) 第七条 役員は次の職務を行う。

- 1. 会長は本会を代表して会務を総括し、副会長は副会長を補佐する。

- 2. 会長、副会長及び委員・監事は役員会を組織し、会務を処理する。
3. 監事は会務及び会計の執行を監査する。(顧問等)

第八条 役員会は名誉会長に人文学部長を、顧問に人文学部教職員経験者(本会正会員)及び会長経験者を、また会務運営のために幹事若干名を委嘱することができる。

(総会)

第九条 総会は四年ごとに開催し、次の事項を審議して出席者の過半数をもって議決する。

- 1. 事業の報告
2. 会計報告
3. 役員を選出
4. 会則の改正及びその他の重要事項(支部)

第一〇条 会員は本会の事業を推進するため、必要に応じ支部を設けることができる。

附則

この会則は令和三年八月二十八日より改正施行す。 省略

鴻文会「賛助会員」の制度に

ご協力をお願いいたします。

鴻文会活動は、毎年度の新入生から入金される「終身会費」(一人一万円)をもとにして行われます。

鴻文会は、同窓会総会の開催、名簿管理、会報発行・送付、ホームページ管理などの活動を行い、最近では山口大学同窓会との連携や「同窓会等」の開催に対する助成を行い、活動も多様化しております。これらの活動を支える資金は、昨今の厳しい経済状況もあって、決して安心できる状態ではありません。そのような中において、ここ数年、卒業生会員や特別会員の皆様から多額のご厚志をいただき、本年度開催の諸活動の資金に充てることができました。ひとえに皆様のお力添えの賜でございます。ご協力ありがとうございました。

活動を支えて下さった方々のお名前を記して、お礼に代えさせていただきます。 なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。 同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。なお、その場合、払込み者に加算料金一〇〇円が発生します。ゆうちょ銀行の口座をお持ちの場合は口座からの払込みをおすすめします。(加算料金は発生しません。)

お礼に代えさせていただきます。
なお、引き続き、賛助会員制度について、お力添えを賜りますようお願い申し上げます。
同封の振替用紙をお使いいただき、一口千円のご寄付を、よろしく願います。
なお、その場合、払込み者に加算料金一〇〇円が発生します。
ゆうちょ銀行の口座をお持ちの場合は口座からの払込みをおすすめします。(加算料金は発生しません。)

賛助会員(順不同 敬称略)

Table with 2 columns: Name and Title. Includes names like 原田嘉子, 水本孝二, 武林寿子, etc.

寄稿依頼、編集、校正など発行に向けた作業の中で、今の大学からあの頃の学生生活など話の輪が広がりました。訂正しお詫び申し上げます。
「鴻文」を契機にこの輪が広がっていくことを願ってやみません。(吉松 茂)
コロナ下での編集に携わりながら、KさんやOさんたち同窓生と気楽に一献傾けられることを一日千秋の想いで待っています。(森重祐二)
お茶の稽古場に「梅経寒苦発清香」のお軸。春もコロナ収束もすぐそこです。(渡邊早苗)
総会の日、構内をゆっくり歩いてみました。八月の暑い日でしたが、人文学部棟へと続く道の辺りが少しひんやりしていました。木々が以前よりも大きくなっているようです。(山本明史)
平川の高倉荒神祭は二月二十八日である。昔は湯田から臨時バスが出る程の賑わいで、小学校は休みだった。今は半ドンだが、子どもたちにもうれしい日である。(大谷泰子)
今回から会報編集のお手伝いをするようになりました。振り返ると素晴らしい先生方の下で先輩や後輩、友人に恵まれた学生生活でした。微力ですが少しでもお役に立てればと思います。(鈴木千登世)
月・火・木曜日の午後一時から五時まで事務の宮澤さんが勤務しています。付近にお越しの際は、鴻文会事務所(沖田ビル二階)にお立ち寄り下さい。
会員の皆様のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。(一同)

編集後記

四〇号掲載の賛助会員のお名前を間違えて掲載してしまいました。訂正しお詫び申し上げます。
正 久米慶典 誤 久米廣典

渋谷律 岡宏樹 若月榮 萬恵子
小野徹 吳娜

令和二年四月一日〜令和三年二月三十一日